ゼミ論文
『満州移民、植民者が抱いた”国際”感覚
～都市と開拓地の比較～』

２００８年２月
日本大学国際関係学部国際交流学科３年
鉄車　真央

I.　構成

第一章：　はじめに

第二章：　五族協和の地、国際大都市ハルビンの日本人

第三章：　満州開拓団、国境近くの日本人たち

第四章：　満洲に生きた人々

第五章：　終わりに

II.　要旨

経済的・社会的・家族的な要因、町村勧誘など様々な理由で多くの日本人が満州国へ移住した。　この論文では、満州各地の異なる社会環境に生活した日本人移民の生活を考察し、そこにおける日本人移民たちの異文化への関心・理解・尊敬度、さらに現地の人々との交際交流やその際の心境を明らかにすることで、当時の日本人の満州国における生活の実態、国際感覚はどのようなものであったかについて考察したい。

最初に、満州国の「国際都市」ハルビンに移住した日本人たちの国際性にあふれた生活の実態を明らかにする。そこで日本人が中国人やロシア人とともに生活した日常の様子について考察する。　次に　日本政府の政策に従って満州国内に用意された辺境の農地に入植した満州開拓団や武装移民たちの生活と、現地の中国人農民との交流の実態を明らかにする。　彼らはどのような国際的意識を持っていたか、そして彼らが　満州国の国策的スローガンであった『五族協和』を実感し実行していたのかも調べたい。　総合して、はたして満州に渡った日本人たち

は「国際性」という意識をもって現地の人びとと交流していたかどうかを明らかにしたい。

大正期までの記録によると、ロシア風文化に満ち溢れた国際都市ハルビンで、日本人は「ハルビン市民」として生活していたように思われる。中国・ロシア・日本の三つの国民が共存し、お互いにその存在を認め合い、ヨーロッパ資本と商業取引をし、ヨーロッパ文化に影響され、異文化を生活に取り入れて生活していたようだ。　一方でハルビンのシステムを日本化し、排他的で日本の独自性が強い社会をつくっていった移民もいた。　特に 1930 年代は「満州国は日本の植民地である」という暗黙の了解が強まり日本人が幅を利かせるようになっていった。古くからハルビンに住むロシア人たちは居心地の悪さを経験するようになり、日本人から「少数民族」として扱われることへの不満が強まった。

　一方満州国農村部に入植した大多数の日本人移民たちも、中国人や朝鮮人に対して差別意識や優越意識を持っていたことは言うまでもない。開拓民は、現地住民との意思疎通を図り、現地住民と協力することを勧められ、現地住民に差別や暴力を働くことがあってはならない、と教えられた。　これは一見すると国際平和・協力的を唱えているようであるが、逆に考えれば　日本人の中国人・朝鮮人に対する差別意識や暴力が横行していたことに当局が苦慮していたことを示すと解釈できる。

もちろん現地住民との「心温まる」交流の記録もあった。　しかし武装移民によって国境付近に建設された村では、中国人や朝鮮人に対する犯罪や、現地住民による日本人村への襲撃が頻発しており、結局協力体制や理解の意識は育たなかった。　中国人、満州人農民は、満州国政府が　彼らの生活や状況を無視した強引な農作物蒐荷工作に強い不満をもっていた。

アジアの歴史研究の専門家、山田昭次氏は 日本の満洲移民政策について　「どんなに個人的に親切をしても、他国の領土を奪った国家の保護下で他民族の耕作した土地の所有者となった国民とその逆の立場の民族の間には真の人間の交流にとって大きな壁があったと思われる。」と述べている。　日本人が満州国での国際交流の大きな壁の経験をふまえて「国際人」として確かな「真の交流」をしていく、という構想にははじめから無理があったのだ。